

# 第4章

## 宿場の賑わい・繁栄 (中山道木曾路11宿の紹介)



# 宿場と街道の発展

## 賑わう宿場の形成と地場産品の流通

木曾路は、鎌倉・室町時代までには信濃と京都・伊勢などを結ぶ重要な通路として発展していましたが、江戸時代には、五街道の一つ中山道の街道整備とともに木曾路11宿といわれる宿場が整備されました。

寝覚ねざめのとこの床、棧かけはし、鳥居峠とりいとうげから遙拝ようはいする御嶽山など木曾谷の情景は、訪れた多くの俳人や浮世絵師などを惹きつけ、詩歌や版画となって世に知られるようになりました。

宿場は訪れる人々を迎えることによる経済的利益の他に、木曾馬や木工品など地場産品の需要がもたらす生産・販売・運輸の拠点として賑わい、木曾谷の経済けんいんを牽引しました。

宿場は、幕府関係の旅人や参勤交代さんきんこうたいの大名通行のために人馬を常備し、輸送・通信などの業務を負う代わりに一般の通行に対する独占かせぎ的な稼が許されました。

多くの旅人の宿泊・休息のための旅籠はたごや茶屋などが設けられ、江戸時代中期には多くの人々がそこで働き発展していきました。

江戸時代中期、森林保護政策が強化されましたが、蘭村では檜物細工ひものざいくの御免白木ごめんしらきの許可を得て、網笠あみがさの地場産業をおこしました。

農家の女性たちの手作業あらいぎひのきがさによる蘭傘あらいぎひのきがさは、旅人や、農作業、林業、土木など広範囲の用途に晴雨にかかわらず着用されたため、中山道を通じて全国に広まりました。

江戸時代中期、街道整備がすすみ庶民の御嶽登拝が盛んになると、全国から多くの御嶽信仰の人々が訪れました。訪れた信者の数は、登山道沿いなどに建てられた霊神碑れいじんひが数万基にのぼることからもその規模の大きさがわかります。御嶽山と木曾路を行き来する人々によって、木曾谷での流通はさらに促進されました。室町時代以来、御嶽山麓しゅげんじゃの修験者しゅげんじゃが食したといわれる「そば」は御嶽山麓開田の特産となり、登拝のために訪れた人々などによって、木曾谷の地場産品や薬「百草ひやくそう」などととも宿場から木曾路を辿り全国に広められました。

※御免白木  
木曾の森林資源を厳しく管理した尾張藩から使用が許可された材木を割り半製品にした材料

近代に入り、御嶽山麓の森林鉄道に木曽ヒノキを満載した列車が走りました。木曽谷の人々が守り続けた木曽ヒノキは、再び木曽の代名詞としてよみがえりました。木曽谷のあらゆる人々がそれぞれの生業<sup>なりわい</sup>を活かして発展させた地場産業は、全国に名高い木曽馬や伝統工芸品などに結実<sup>けつじつ</sup>しました。

文豪 島崎藤村の著書『夜明け前』は「木曽路はすべて山の中である。」で始まります。木曽路は、人々の「山を守り、山に生きる」くらしを育みました。そのくらしは、森林の保護、宿場の保存、伝統工芸品の伝承を大切に思う心を培い、今も木曽谷の人々に息づいています。



妻籠宿保存地区



野尻宿



妻籠宿高札場



神宮美林



一石橋立場茶屋



福島関所





ふくしませきしよ

## 福島関所

## ■基本データ

- 住所 木曾郡木曾町福島5017-1
- アクセス JR「木曾福島駅」から徒歩約25分、  
伊那ICから30km40分
- 連絡先 福島関所資料館 / TEL 0264-23-2595
- 指定 国史跡(1979年)



「福島関所」は、中山道の江戸と京都のほぼ中間にあたり、要衝として約270年間「入鉄砲・出女」などを取り締まった場所で、箱根、新居、碓氷と並び、天下の四大関所の一つに数えられています。

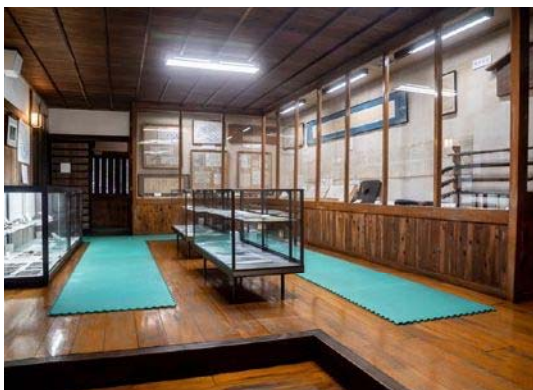
有事の際には関所をすぐ閉鎖できるよう、木曾川の断崖に臨む、険しく、狭い場所に設けられました。

関ヶ原の戦いで功績をあげた山村氏が、1869年(明治2)まで274年間、13代にわたって関守を務めました。

関所は、諸大名の妻子が江戸から逃亡することを監視する役割があり、「女手形」はここで没収され、江戸へ向かう女性には碓氷関所宛の書替手形が発行されましたが、1刻(2時間)の時間が掛かったといわれています。

関所跡は1975年(昭和50)に発掘調査がおこなわれ、遺構、建物の位置や規模等が文献史料と照合しながら確認されました。1979年(昭和54)に国の史跡に指定され、現在は史跡公園になっています。

敷地内には門や柵が復元され、関所の番所建造物を再現した福島関所資料館があり、関所通行に関連する古文書や用具、関所に置かれていた武具などが展示されています。



## 歴史的背景

福島関所は中山道福島宿から池井坂を上った江戸方に置かれていました。代官屋敷からは木曾川をはさんで対岸の高所にあり、一方は山、一方は木曾川に臨む断崖の上にあります。敷地は東門から西門までの間21間4尺(約41m)、南北山際から木曾川の断崖まで臨む柵まで16間(約30m)の狭い場所に設けられ、三方は木柵で囲まれていました。番所の背後は約40度の急傾斜の山で、大木が生茂り立ち入り禁止となっていました。

関所の番所は上番所(うわばんしょ)と一段さがった下番所(したばんしょ)があり、通常上番所には給人格(きゅうにんかく)2名、下番所には足軽同心4名ずつが当番で一昼夜交替で勤めました。

対岸の願行寺(がんぎょうじ)の時の鐘を合図に、明け六つ(午前6時頃)に門を開け、暮れ六つ(午後6時頃)に門を閉め、当番を交替しました。夜間は、飛脚や急な公用の使者、荷物継立人足以外の一般の旅人の通行は許されませんでした。

江戸時代は旅をするために通行手形が必要でした。手形は当時の戸籍である宗門改めを扱った寺や村の名主、庄屋などが発行しました。

上番は関所の責任者で、手形を受け取って照合し、通行許可を与えました。下番は手形持参人の取次、徒歩の女改め、鉄砲・荷物・長持ち改め、通行許諾の伝達のほか関所内の掃除、諸道具の手入れを担当していました。そのほかに、門番が夫婦で常駐し、門の開閉、掃除などに従事し、乗り物の改めなどをおこなっていました。

■主要参考文献 / 『木曾～歴史と民俗を訪ねて』(木曾教育郷土館部編著 信教出版部 2010)

『あれこれ木曾町再発見 木曾町を学ぶ』(木曾町を学ぶ本づくり検討会 木曾町観光協会2013)

『長野県の歴史散歩』(長野県の歴史散歩編集委員会 山川出版社 2006)



# 史跡 中山道

## ■基本データ

**アクセス** JR「南木曾駅」からタクシーで約10分、  
中津川川から約30分

**連絡先** (一社)南木曾町観光協会 / TEL 0264-57-3123

**指定** 国史跡(1991年)

中山道は、1601年(慶長6)から翌年にかけて徳川家康により五街道の一つとして、江戸から京都までの重要な街道として整備されました。

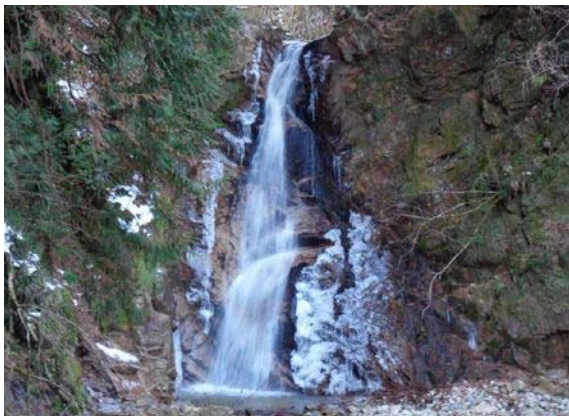
史跡中山道として登録されている区間は馬籠峠から根の上峠までの総延長19.6kmのうち、中山道の旧態が良く残っている8.5kmです。

馬籠宿～妻籠宿間は約8kmありゆっくり歩いて約3時間程の所要時間となります。

途中、吉川英治の小説「宮本武蔵」で修行の舞台となった男滝・女滝や番所跡の一石桁などがあります。



男滝(おだき)



女滝(めだき)



## 与川道

木曾川沿いの中山道は土石流などでたびたび通行不能となったため、迂回路として大桑村と南木曾町の境にある根の上峠を越える与川道ができました。途中、中山道(与川道)を通して徳川家に降嫁した姫君(比宮・楽宮)の休憩所として設置された松原御小休所跡へ行くこともできます。江戸時代からほぼ変わることのない道筋は、往時の旅人の気分を感じることができます。

## 上久保の一里塚

江戸から数えて78番目の一里塚。1604年(慶長9)、幕府は江戸日本橋を起点に一里(約3.9m)ごとに五間(約9m)四方高さ一丈(約3m)の塚を築き、塚の上に木を植えさせました。上久保の一里塚には枝垂梅の古木があり、春先に花を咲かせ旅人を楽しませます。

第1章  
日本遺産とは  
日本遺産木曾路

第2章  
江戸時代以前の  
木曾の暮らし

第3章  
尾張藩による森林保護  
と地場産業の奨励

第4章  
宿場の賑わい・繁栄  
中山道・木曾路11宿

第5章  
明治以降の木曾檜活用、  
森林鉄道

第6章  
木曾の暮らし、風土、  
宗教(御嶽山信仰)

第7章  
その他  
(観光宣伝など)



# いちこくとちたてばちや 一石柵立場茶屋

## ■基本データ

- 住所 長野県木曾郡 南木曾町吾妻下り谷1612-2
- アクセス JR「南木曾駅」からタクシーで10分、  
中津川ICから約30分
- 連絡先 妻籠を愛する会 / TEL 0264-57-3513
- 指定 国重要伝統的建造物群保存地区指定家屋

たてばちや

立場茶屋とは宿と宿の中間にあって旅人に休息と利便を与えました。一石柵は妻籠宿と馬籠宿の中間に位置し、往時は17軒ほどの家があり栄えていましたが、今では牧野家住宅1軒だけになっています。

牧野家住宅は江戸時代後期の農家の建物で、当初は間口が十間半もある大きなものでしたが、現在の建物は1872年(明治元)の建築です。

現在は無料休憩所として活用されています。建物内部には囲炉裏があり、千本格子から光が差し込み、当時の生活の様子を垣間見ることができます。

一石柵立場茶屋のすぐ横には一石柵白木改番所跡があります。



一石柵立場茶屋で旅行を楽しむ海外観光客



中山道からの一石柵立場茶屋

## 一石柵白木改番所跡

木曾谷の木々は、この地方を治めていた尾張藩の重要な資源となっていました。

番人は輸送されている白木のすべてを確認し、合法的に伐採されたものであることを証明する公式の焼印のあるものしか通過させませんでした。

妻籠宿の白木改番所(木材・木工品などの出荷取締り)は当初は少し北の下り谷に設置されていましたが、1749年(寛延2)の山崩れにより一石柵に移されました。木曾では江戸時代中期以降、木曾五木(ヒノキ・サワラ・アスナロ・コウヤマキ・ネズコ)をはじめとする伐採禁止木の出荷統制が続き、伐採規制は「木一本首一つ」と言われるほど厳しく取り締まられていました。統制は1869年(明治2)の藩籍奉還まで続きました。



一石柵立場茶屋前の八重のシダレザクラ(開花は5月GW前後)

# 宿場におかれた「<sup>ほんじん</sup>本陣」と「<sup>わきほんじん</sup>脇本陣」

江戸時代、幕府は江戸を起点とした各地を結ぶ5つの主要街道を整備しました。東海道、中山道、甲州街道、奥州街道、日光街道は、総称して「五街道」と呼ばれました。

この五街道の一つである中山道は、江戸と京都を結んだ街道で、全長132里(約550Km)の街道には69の宿場がおかれ、各宿場は多くの人で賑わいました。

宿場には「本陣」という身分の高い大名や皇族が宿泊する建物と「脇本陣」という本陣の予備施設、家臣や一般人が宿泊する「<sup>はたご</sup>旅籠」が設けられました。



宮越宿本陣



脇本陣奥谷(妻籠宿) 林家家屋

## 「<sup>はたご</sup>旅籠」と「<sup>きちんやど</sup>木賃宿」



また、一般の旅人が宿泊するところには「旅籠」と「木賃宿」がありました。

旅籠では夕食と朝食を出し、店によっては昼食を出すところもありました。

一方、木賃宿は、旅人が米を持参し、薪代を払って自分で米を炊くかまたは炊いてもらいました。「木賃」とはこのときの薪の代金、つまり木<sup>き</sup>銭を意味しています。

江戸時代以前には木賃宿が宿泊の本来の姿でしたが、庶民の旅が盛んになるにしたがい、次第に旅籠が増え、宿代も1830～1844年(天保年間)には旅籠屋は木賃宿の5倍以上もするというので、木賃宿は安宿の代名詞となってしまいました。場所も宿場のはずれなどにありました。

■主要参考文献／国土交通省 関東地方整備局 横浜国道事務所HP参考



# 中山道の参勤交代

江戸時代、中山道は東海道と比べ、陸路が多いため安定して通ることができたので、比較的多くの旅人が往来しました。東海道には伊勢湾の渡しや、大井川のような大河の渡しなどで、長期に渡る悪天候により渡場で止められることがありました。とはいえ、「木曾の棧、太田の渡し、碓氷峠がなくばよい」と言われたように、中山道にも険しい坂や激流の河川が旅人を阻みました。ですが交通量が東海道ほど過密でなく、休泊料も比較的安いこともあって旅行者に好まれました。

参勤交代の大名数は、東海道の146家に対して中山道は30家で、約5分の1程度であり、奥州道中の37家にも及びません。これを反映して宿駅の常備人馬数も、東海道の100人・100疋に対し、中山道は50人・50疋(うち木曾11か宿ほか5～6か宿はその半分)にすぎず、また本陣数は一宿平均1.1軒、旅籠屋数は27軒で、東海道の約半分でした。

とくに木曾路11宿などでは常備人馬の確保がむずかしく、2～3か宿の合体継立が必要で、助郷人馬も山越えしたはるか遠方伊那谷の村々から呼び集めねばなりませんでした。

■参考文献／『長野県文化財保護協会編『中山道信濃26宿』(丸山雍成1980・信濃毎日新聞社)』

## 中山道を通りご降嫁した姫君

徳川家は天皇家との外戚関係を継続させるために、皇族や公家の娘を将軍の夫人にしてきました。これらの姫君たちはいずれも中山道を通って江戸に向かいました。姫君の通行が多くあったため、中山道は姫街道とも呼ばれています。

中山道は、江戸へ輿入れする姫君の通行が多く、浅宮(伏見宮家の姫宮)、比宮(伏見宮家)、五十宮(閑院宮家)、楽宮(有栖川宮家)、登美宮(とみのみや)、有姫(鷹司家)、寿明君(一条家)、鋭姫(広幡家)など京都の宮家や公家の姫たちが将軍家や水戸徳川家などに輿入れするために通行しました。

もっとも有名なのが十四代将軍 徳川家茂へ嫁いだ和宮です。

輿入れ時の年月日	姫君の名前	年齢	嫁ぎ先
1731年(享保16)4月	比宮(なみのみや)	19歳	9代将軍 家重
1749年(寛延2)3月	五十宮(いそのみや)	11歳	10代将軍 家治
1804年(文化元)9月	楽宮(さざのみや)	9歳	12代将軍 家慶
1831年(天保2)3月	登美宮(とみのみや)	27歳	水戸家 徳川斉昭
1831年(天保2)9月	有姫(ありひめ)	9歳	13代将軍 家定
1849年(嘉永2)9月	寿明君(すめぎみ)	23歳	13代将軍 家定
1861年(文久元)11月	和宮(かずのみや)	16歳	14代将軍 家茂



和宮内親王

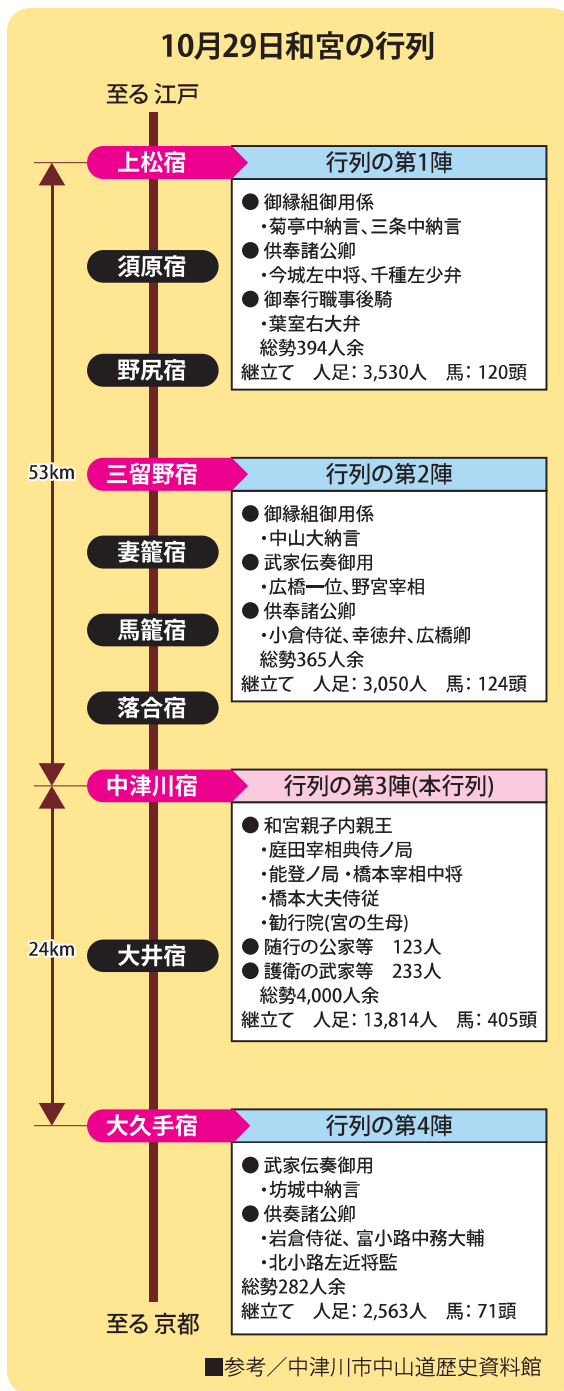
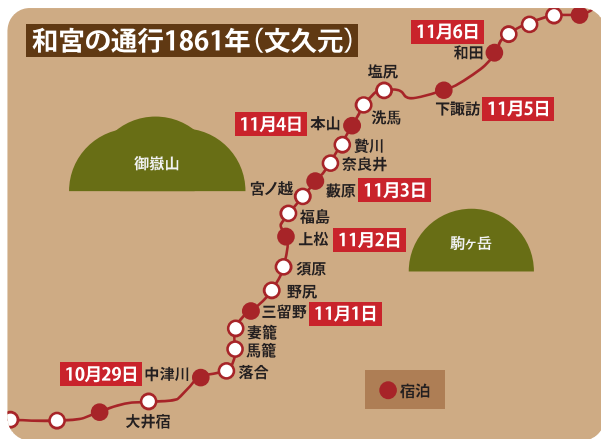
■主要参考／中津川市中山道歴史資料館

# 皇女和宮の大行列

1861年(文久元)、孝明天皇の妹である和宮内親王が第14代将軍徳川家茂へ降嫁しました。その行列は、中山道始まって以来の大行列で、随行の公家や護衛の武士、荷物を運ぶ人足などが前後を固め、人数は約2万人ともいわれ、4つのグループに分れて進んだ花嫁行列は長さは77kmにも及びました。

和宮の宿泊地は10月29日に中津川宿、翌日から木曾路11宿での宿泊は11月1日が三留野宿、2日が上松宿、3日が藪原宿とあります。

京都を出発したのは10月20日、江戸入城が11月15日ですから24泊25日の行程でした。



第1章  
日本遺産とは  
日本遺産木曾路

第2章  
江戸時代以前の  
木曾の暮らし

第3章  
尾張藩による森林保護  
と地場産業の奨励

第4章  
宿場の賑わい・繁栄  
中山道・木曾路11宿

第5章  
明治以降の木曾檜活用、  
森林鉄道

第6章  
木曾の暮らし、風土、  
宗教(御嶽山信仰)

第7章  
その他  
(観光宣伝など)

## 現代の皇女和宮降嫁行列

### ●馬籠宿場まつり

馬籠宿で毎年11月上旬に開催されている馬籠宿場まつりでは、幕末に皇女和宮が中山道を通って嫁いだ様子を再現した「皇女和宮降嫁行列」を開催しています。和宮や女官に扮した行列が宿場を練り歩きます。





# 歌人・俳人に愛された木曾

## 中山道を旅した著名人



**貝原益軒** かいばら・えきけん(1630-1714) ●福岡藩士、儒学者、本草学者

1685年(貞享2)、江戸から中山道を通って京都まで旅をしたと、『東路記』(別名『木曾路之記』)に記述があり、木曾の棧のことを書いています。

是より七八町下りて木曾のかけ橋有。木曾川にかけたる橋にはあらず。山のそば道の絶えたる所にかけたる橋也。右の方は木曾川のきはなり。横二間長さ十間ある板橋也。欄干有り、両旁は石垣をつき、むかしはあやうき所也けらし。今は尾州君より此橋を堅固にかけ給て、聊あやうき事なし。



**松尾芭蕉** まつお・ばしょう(1644-1694) ●俳人

更科の名月を見るため木曾路に入ったと『更科紀行』に記述があり、『野ざらし紀行』『笈(おい)の小文』でも中山道を歩いています。

**送られつをくりつ果ては木曾の秋**

(楡川支所駐車場 塩尻市大字木曾平沢1451-138)  
(中津川市馬籠 新茶屋)

**木曾の栃 うき世の人の 土産かな  
ひばりより うへにやすらふ 峠かな**

(木祖村 鳥居峠丸山公園内 木曾郡木祖村藪原)

**杜かげや われらもきくや 郭公**

(木祖村 藪原神社参道途中 木曾郡木祖村藪原499-1)

**思い立つ 木曾や四月の桜狩り**

(木曾町新開・福島宿の手前、国道19号の福島トンネル手前500m、警察署向かい 左側の落石防止金網切目の中)

**さざれ蟹<sup>かに</sup> 足這いのぼる 清水哉**

(福島 木曾福島郷土館裏 木曾郡木曾町福島5823-8)

**かけはしや 命をからむ 蔦かつ羅**

(福島 津島神社 木曾郡木曾町福島6015-3)  
1766年(明和3)福島 of 俳人巴笑が初めて石碑として建立し  
崖崩れで埋まったものが、明治期に発見され、  
1882年(明治15)にこの神社に建立されました。

**かけはしや 命をからむ 蔦かつら**

(上松町 木曾の棧の左岸と右岸 木曾郡上松町上条1350)

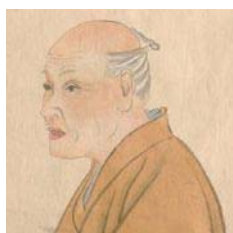
**ひる顔にひる寝せふもの床の山**

(上松町 臨川寺境内 木曾郡上松町上松1704)



**伊能忠敬** いのう・ただたか(1745-1818) ●商人、測量家

正確な日本地図を作るため全国を測量しました。1807年、第7次測量調査で九州へ向かう際に中山道を測量し、その記述が『伊能忠敬測量日記』に残されています。



**大田南畝** おおた・なんぼ(1749-1823) ●文人、狂歌師、御家人

狂歌師・蜀山人として知られますが、御家人としても優秀でした。大阪銅座勤務後、中山道を通って江戸へ帰還しています。

江戸時代、大田南畝(蜀山人)が『壬戌紀行』(じんじゅつきこう)で妻籠を次のよう描写しており、妻籠ではいまでもその様子が残っているといわれています。

「妻籠の駅は馬籠とともにひなびたり。駅舎のかんばんに膳めし、うり銭、などかけり。又名物合もろ白、とかけり」



## 横井也有 よこい・やゆう(1702-1783) ●武士、国学者、俳人

1745年(延享2)4月13日、横井也有は第八代尾張藩主宗勝公のお供をして江戸から帰る時に臨川寺に立ち寄っています。

### 綿入れを木曾路の夏や花の旅

(木曾福島駅 木曾町福島)

上松町臨川寺境内に黒色の粘板岩の小さな自然石に彫られ建てられています。巴笑と福島の連中によって建てられました。横井也有は尾張藩の重臣ですが、俳句、和歌、狂歌、書画と何でもこなした文化人で俳文集「鶉衣」(うずらころも)を著しています。

### 筏師に何をか問む青あらし

(上松町 臨川寺境内 木曾郡上松町上松1704)



## 十返舎一九 じっぺんしゃ・いっく(1765-1831) ●江戸時代後期の戯作者、絵師

江戸後期の大衆作家・浮世絵師である十返舎一九は1811(文化8年)に初めて信濃を訪れ、中山道を軽井沢から木曾路へ抜けています。

これをもとに、『木曾街道続膝栗毛』第3編(文化9年)、第4編(文化10年)、第5編(文化11年)が書かれています。

1814年(文化11)には、木曾から松本に入り、穂高、大町、新町、稲荷山を通して善光寺に参詣し、越後へ抜けました。これが、『木曾街道続膝栗毛』第6編(文化12年)、第7編(文化13年)、『従木曾路善光寺道続膝栗毛』第8編(文化13年)の材料となりました。

峠集落(中津川市)に句碑があります。

### 渋皮のむけし女は見えねども栗のこはめし(強飯)ここ乃名物

(中津川市馬籠 馬籠峠 清水公衆トイレ)

1816年(文化13)には、『続膝栗毛 木曾街道』に寝覚の床のことも書いています。

「此ところに臨川寺といふ景地あり。寝覚の床といふこれなり。むかし浦島太郎釣をたれし所なりと云伝う」

話では主人公の弥次郎兵衛と喜多八、繋げて『弥次喜多』が京を出発し中山道を善光寺までの道のりの旅の滑稽本。木曾路は『妻籠宿』『野尻驛』『須原驛』『寝覚の床』『上松宿』『福島驛』『宮の腰驛』『藪原宿』『奈良井驛』『贄川驛』の話となっています。



## 良寛 りょうかん(1758-1831) ●曹洞宗の僧侶、歌人、漢詩人、書家

てまり上人といわれた良寛が、木曾路を通った折 詠まれた2首です。

### この暮れのもの悲しきに若草の妻呼びたてて小杜鹿鳴くも

(南木曾町久保洞中山道「上久保」一里塚100m妻籠寄の久保洞(くぼほら)道標近傍)

### さむしろに衣かたしきぬばたまのさ夜ふけ方の月を見るかも

(南木曾町読書与川 古典庵跡)



## 日下部金兵衛 くさかべ・きんべえ(1841-1932) ●写真家

横浜で写真館を開き、各地の彩色写真を残しています。『金幣(きんぺい)アルバム』に、松井田から木曾までの写真が収録されています。(1886年)





## 正岡子規 まさおか・しき(1867-1902) ●俳人、歌人、国語学研究者

1891年(明治24)、東京大学の学生だった正岡子規は善光寺を参拝した後、善行寺街道、木曾路を通り、愛媛県の松山に帰る旅をしました。

「かけはしの記」に次のような記述があります。

妻籠通り過ぐれば三日の間寸時も離れず馴れむつひし岐蘇河に別れ行く。何となく名残惜まれて若し水の色だに見えやせんと木の間／＼を覗きつゝ迎れば馬籠峠の麓に來たり。

此の山を越ゆれば木曾三十里の峽中を出づるとなん聞くにしばしば越し方のみ見かへりてなつかしき心地す。

### 白雲や 青葉若葉の三十里

(南木曾町 馬籠峠頂上付近)

「上松を過ぐれば程もなく寢覚の床なり。寺に至りて案内を乞へば小僧絶壁のきりきには立ち遙かの下を指してここは浦島太郎が竜宮より帰りて後に釣を垂れし跡なり。(中略)誠やここは天然の庭園にて松青く水清くいづこの工匠が削り成せる岩石は 峨々として高く低く或は凹みて渦をなし或は逼りて瀧をなす。いか様仙人の住処とも覚えてたふとし。」(『かけはしの記』での寢覚の描写)

### かけはしや水へとどかず五月雨

(木曾の棧 上松町上条1350)

木曾の棧とは対岸へ架した橋ではなくこの絶壁に平行して作られた栈道であった。この地に建立されていた明治天皇駐蹕碑、芭蕉句碑等は総て橋を渡った対岸の地に移された。現在も対岸から保存された慶安の石垣を見ることができる。

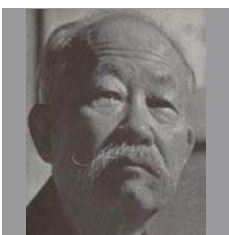
### 寝ぬ夜半を いかにあかさん 山里は 月出づほどの空だにもなし

(大桑村須原894)

### 桑の実の 木曾路出づれば 穂麦かな

(中津川市馬籠 新茶屋 中山道の路傍)

「かけはしの記」には、この句の前に「馬籠下れば山間の田野照稍々開きて麦の穂已に黄なり。岐蘇の峽中は寸地の隙あらばここに桑を植え一軒の家あらば必ず蚕を飼うを常とせしかば、今ここに至りて世界を別にするの感あり。」と述べています。



## 幸田露伴 こうだ・ろはん(1867-1947) ●小説家

幸田露伴が木曾路を訪れたのは1890年(明治22)の事で、須原宿で宿泊した時の経験が代表作である「風流仏」(ふうりゅうぶつ)の制作の基になったとされます。

小説「風流仏」は、桜の花漬を売りに来た娘に、旅の仏師が恋をする物語です。

風流仏には、桜の花漬について下記のように書かれています。

ご覧下され 是は当所の名誉花漬、今年の夏の暑さをも越して 今降る雪の真つ最中、色もあせずにおります梅桃桜のあだくらべ、御意に入りましたら陰膳を信濃へ向けて人知らぬ寒さを知られし都の御方へ御土産に、...

須原駅前前の文学碑に「幸田露伴と須原宿」と題して次のように刻まれています。

「文豪幸田露伴は明治22年冬の頃木曾路を旅して須原に泊る。

彼はこの地を訪ねた縁を基にその出世作小説「風流仏」を著す。

時に22歳。

ここに文中の一部を抜粋し記念碑として文豪露伴を偲ぶ。」とあり、

小説「風流仏」の最初の部分が刻まれています。



## 島崎藤村 しまざき・とうそん(1872-1943) ●小説家

日本を代表する作家であり、藤村の故郷である馬籠宿を中心に木曾路周辺を題材にした作品も多く見られます。

「昼食の時に寢覚に送ろうとして道を急ぐことは、木曾路を踏んで見るもののひとしく経験するところである。そこに名物の蕎麦がある。春とは言ひながら石を載せた板屋根に残った雪、街道の側に繋いである駄馬、壁を泄れる煙……寢覚の蕎麦屋あたりはまだ冬籠りの状態から完全に抜けきらないやうに見えていた。」(『夜明け前』で蕎麦屋の風景を描く一説)

木曾郷土館と中津川市馬籠陣場<sup>じんばうえ</sup>上展望台に『夜明け前』の文学碑があります。

「木曾路はすべて山の中である。あるところは岨(そば)づたひに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いてゐる。」(『夜明け前』冒頭第一部序の章)

「寢覚は浦島の故事をかりて、岩のほとりのながめ深く静かなところに、浦島の釣を垂れたといふ床もある。臨川寺の弁天堂には浦島の釣竿といふのがある。そのほとりに姿見の池もあって、奇を好む旅人の必ず立ち寄り名所となつてゐる。(中略)この竜宮の入口にも秋は暮れて、垣根に残っている黄菊の花もあはれであつた。」(『一葉舟』(ひとはぶね)木曾路日記(きそだに)につき)での寢覚の描写)

日本遺産木曾路 構成文化財 ⑫島崎藤村宅(馬籠宿本陣)跡4章-115P参照

●島崎藤村 115P参照 ●藤村記念館 116P参照



## 種田山頭火 たねだ・さんとうか ●(1882-1940)俳人

種田山頭火が木曾路を訪れたのは1939年(昭和14)の事で「旅日記」にその行程が記載されています。

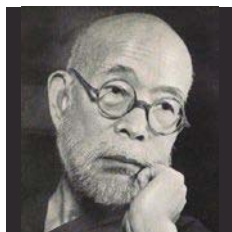
おべんとうを食べて洗ふて寢覚めの床で

(上松町 臨川寺境内 木曾郡上松町上松1704)

さくらちりをへたるところ 旭将軍の墓

(木曾町 興禅寺木曾義仲墓所の前 木曾町福島門前5659)

旧小林寫真館本店  
小林銀汀 撮影



## 斎藤茂吉 さいとう・もきち(1882-1953) ●歌人、精神科医

1936年(昭和11)、斎藤茂吉がアララギ歌会に出席するため、三留野から大平峠を越えて飯田へ向かいました。

このとき「大平峠」と題した歌が17首詠まれています。その中の一首を刻んだ歌碑が南木曾側の木曾見茶屋付近に建立されています。

麓には あららぎという村ありて 吾にかなしき 名をぞとどむる

(南木曾町南木曾側の木曾見茶屋付近)



# 文化の行き交う木曾に見る浮世絵

## 木曾海道六拾九次・木曾路11宿

『木曾海道六拾九次』は1835年(天保6)頃着手され、当時、美人画で名をはせた浮世絵師・溪斎英泉(1791年～1848年)が手がけ、途中、『東海道五拾三次』で成功を納めた歌川広重(1797年～1858年)に受け継がれました。

艶やかな美人画を得意とする英泉と、叙情的風景を描く広重という、作風の異なる二大作家による連作は、他の風景画にない異色の魅力を持つ大作中の大作と言われています。



### 贄川宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち にかわ  
木曾海道六拾九次之内 贄川 歌川広重  
夕暮れ時の贄川宿旅籠



### 宮ノ越宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち みやのこし  
木曾海道六十九次之内 宮ノ越 歌川広重  
木曾橋にかかる大橋



### 奈良井宿

きそかいどう ならいじゅうめいさんてんのず  
岐阳街道 奈良井名産店之図 溪斎英泉  
鳥居峠麓のお六茶屋



### 福島宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち ふくしま  
木曾海道六拾九次之内 福島 歌川広重  
福島関所東門から番所



### 藪原宿

きそかいどう やぶはらとりいとうげすずりしみず  
木曾海道 藪原鳥居峠硯ノ清水 溪斎英泉  
鳥居峠から望む御嶽山



### 上松宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち あげまつ  
木曾海道六拾九次之内 上ヶ松 歌川広重  
小野の滝(中山道沿い)



## 葛飾北斎(かつしか ぼくさい)

しょくたきめぐり きそかいどうおののぼくふ  
 諸国滝廻り 木曾海道小野ノ瀑布 葛飾北斎筆  
 1833年(天保4)大判 錦絵  
 所蔵先/「島根県立美術館蔵」

木曾海道六拾九次でも「上ヶ松」(歌川広重)に描かれています。北斎の名画、小野の滝。上松町に現存する滝ですが、眼前の中山道は国道19号線になり、滝頭上JR軌道が架けられ当時の名勝の面影は滝の流れだけとなってしまいました。想いをはせることができます。滝壺脇の不動尊御堂と石碑、常夜灯など当時の御嶽信仰の水行の場所でもあったようです。



第1章  
 日本遺産とは  
 日本遺産木曾路

第2章  
 江戸時代以前の  
 木曾の暮らし

第3章  
 尾張藩による森林保護  
 と地場産業の奨励

第4章  
 宿場の賑わい・繁栄  
 中山道・木曾路11宿

第5章  
 明治以降の木曾檜活用、  
 森林鉄道

第6章  
 木曾の暮らし、風土、  
 宗教(御嶽山信仰)

第7章  
 その他  
 (観光宣伝など)



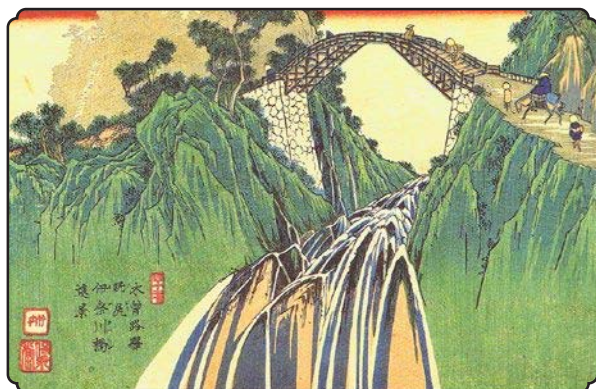
### 須原宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち すはら  
 木曾海道六拾九次之内 須原 歌川広重  
 須原の鹿島神社と大杉



### 妻籠宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち つまご  
 木曾海道六拾九次之内 妻籠 歌川広重  
 妻籠峠付近の峠道



### 野尻宿

きそかいえき のじり いなかわばしえんけい  
 木曾路駅 野尻 伊奈川橋遠景 溪斎英泉  
 伊奈川橋と岩出観音



### 馬籠宿

きそかいどう まごめえき とうげよりえんぼうのず  
 木曾街道 馬籠驛 峠ヨリ遠望之図 溪斎英泉  
 馬籠峠から西を遠望



### 三留野宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち みどの  
 木曾海道六拾九次之内 三留野 歌川広重  
 東山神社を近くの畑から望む

※「木曾海道六拾九次」については  
 図版の表記どおり、「街道」ではなく「海道」として記載します。

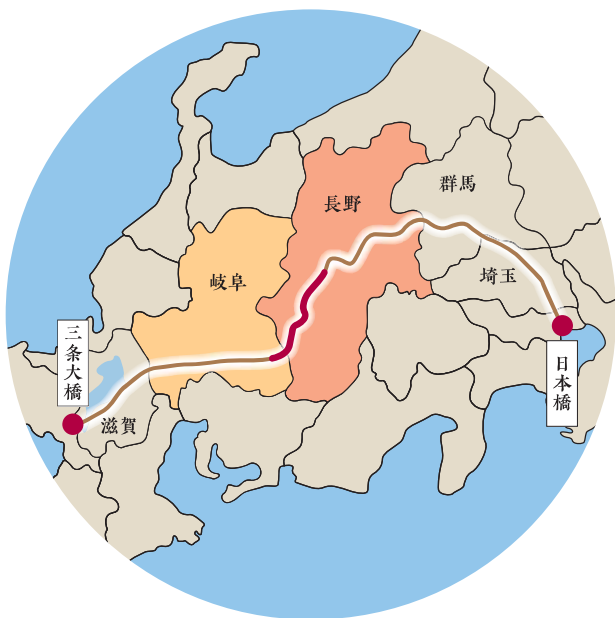


# 中山道六十九次<sup>つぎ</sup>-木曾路11宿

## 江戸時代に整備された宿場町

1600年(慶長5年)関ヶ原の戦いによって覇権を確立した徳川家康は、江戸を中心とする五街道(東海道・中山道・日光街道・奥州街道・甲州街道)を整備しました。中山道は、1601年(慶長6)から伝馬を出す宿場に朱印状が出されており、この頃成立しました。

家康は全国支配のために政治・軍事上の役割を果たす宿駅伝馬の制を、1603年(慶長8)に開幕する以前から定めて実施しました。このため宿駅は一度に設置されず、中山道が確定したのは江戸時代前期、参勤交代が制度化された1630年代(寛永の中頃)といわれています。



中山道の主要ルートは、日本橋→大宮→熊谷→高崎→軽井沢→塩尻→福島→馬籠→大井→伏見→関ヶ原→草津(東海道と合流)→京都。

江戸から武蔵国(埼玉県)、上野国(群馬県)、信濃国(長野県)、美濃国(岐阜県)、近江国(滋賀県)を経て京都に至ります。

そのうち木曾路と呼ばれるものは贅川～馬籠の11宿。起点の日本橋から数えると、第33～43次にあたります。

## 中山道木曾路11宿

- 第33次 贅川宿(にえかわ)(長野県塩尻市)  
▼7.4km
- 第34次 奈良井宿(ならい)(長野県塩尻市)  
▼4.9km 鳥居峠の難所
- 第35次 藪原宿(やぶはら)(長野県木曾郡木祖村)  
▼7.7km
- 第36次 宮ノ越宿(みやのこし)(長野県木曾郡木曾町)  
▼7.4km
- 第37次 福島宿(ふくしま)(長野県木曾郡木曾町)  
▼9.0km 木曾の棧の難所
- 第38次 上松宿(あげまつ)(長野県木曾郡上松町)  
▼12.4km 寝覚めの床
- 第39次 須原宿(すはら)(長野県木曾郡大桑村)  
▼7.0km
- 第40次 野尻宿(のじり)(長野県木曾郡大桑村)  
▼8.9km
- 第41次 三留野宿(みどの)(長野県木曾郡南木曾町)  
▼4.7km
- 第42次 妻籠宿(つまご)(長野県木曾郡南木曾町)  
▼7.4km
- 第43次 馬籠宿(まごめ)(岐阜県中津川市)

全長は約76.8km

\*距離は『中山道浪漫の旅(東編)』(岸本豊 信濃毎日新聞社)著者による計測距離。  
一般的には、『大概帳』に記された里程を合わせ、全長約88kmと紹介されることが多いですが、必ずしも正確ではありません。

古くは「木曾路」「中仙道」とも呼ばれ、「中山道」に統一されたのは1716年(正徳6)。2016年(平成28)で300年を迎えました。

総距離は135里24町8間(約538km)で、同じく江戸と京都と結ぶ東海道より約41km長く京都まで要した日数は約15日(東海道は川留めがなければ約13日)です。交通量は東海道の半分

ほどでしたが、天候が荒れると川が渡れなくなくなり、大幅に遅れることのある東海道に比べ、日程通りに行程を組めることから、険しい峠があるなど高低差があるにもかかわらず、商人はむしろ中山道を使うことが多かったようです。

江戸の五街道の中でも歴史的な建物がよく保存されているエリアが多いため、歴史好き、街道好き、芭蕉ファンなど、歴史に関心をもつ観光客が多く訪れます。ひとつの宿場だけでなく、11の宿場を通して楽しもうという観光スタイルに関心をもつ人も少なくありません。

## 江戸時代の宿場の規模

1843年(天保14)

奈良井宿は旅籠数5に対して家数409と宿内人口が多く、江戸時代から曲げ物、櫛、木曾漆器などの木工業が盛んで旅の土産物としても人気がありました。旅籠数も多く宿内人口の多い上松宿は木曾檜の集積地として栄えていました。

- 贄川 [第33次]  
(本陣1、脇本陣1、旅籠25、家数124、宿内人口545人)
- 奈良井 [第34次]  
(本陣1、脇本陣1、旅籠5、家数409、宿内人口2,155人)
- 藪原 [第35次]  
(本陣1、脇本陣1、旅籠10、家数266、宿内人口1,493人)
- 宮ノ越 [第36次]  
(本陣1、脇本陣1、旅籠21、家数137、宿内人口585人)
- 福島 [第37次]  
(本陣1、脇本陣1、旅籠14、家数158、宿内人口972人)
- 上松 [第38次]  
(本陣1、脇本陣1、旅籠35、家数362、宿内人口2,482人)
- 須原 [第39次]  
(本陣1、脇本陣1、旅籠24、家数104、宿内人口478人)
- 野尻 [第40次]  
(本陣1、脇本陣1、旅籠19、家数108、宿内人口986人)
- 三留野 [第41次]  
(本陣1、脇本陣1、旅籠32、家数77、宿内人口は594人)
- 妻籠 [第42次]  
(本陣1、脇本陣1、旅籠31、家数83、宿内人口418人)
- 馬籠 [第43次]  
(本陣1、脇本陣1、旅籠18、家数69、宿内人口717人)

(出典:『天保14年改め中山道宿村大概帳』)



「これより南 木曾路」の碑



「これより北 木曾路」の碑



# 江戸時代の街道旅行

江戸時代には中山道をはじめとする街道を多くの庶民が旅行しました。こうした旅行が盛んになったのは、右の理由によると考えられています。

庶民の旅行の代表は伊勢参りであり、1705年(宝永2)のブームでは本居宣長が松坂の宿で50日間の通行人の数を326万人と記録しています。

同様に善光寺参り、御嶽山参りなどの信仰の旅が盛んにおこなわれました。旅へは3~5人のグループで出かけるのが一般的で、往来手形(パスポートにあたるもの)が必要でした。道中記(旅行ガイドブック)も盛んに刊行されました。代表的なものに『<sup>みやこじ</sup>都路』『中山道往来』などがあります。

- 平和な時代が続き、旅先での安全が増した
- 街道や宿場が整理され、旅行のためのインフラが整った
- 庶民にも蓄えができ、旅行の可能な経済的ゆとりができた  
(また信仰の旅であれば、旅人に施しが与えられる文化があった)

江戸後期、江戸の農民・国三郎が伊勢参りに出かけた際の旅費		
費目	当時の費用	現代換算
旅籠代(15泊)	2,904文	8万7,120円
昼食・間食・茶代	1,095文	3万2,850円
菓子・団子など	421文	1万2,630円
大井川渡し	180文	5,400円
その他渡し舟	265文	7,950円
駕籠	1,456文	4万3,680円
社寺賽銭	308文	9,240円
草鞋(わらじ・11足)	163文	4,890円
按摩(あんま)	24文	720円
その他(ちり紙など)	174文	5,220円
合計	6,990文	20万9,700円

(出典:coop 共済サイト『弘化二年伊勢参宮覚』による東海道の旅費)

## 当時の旅費や服装

旅籠賃は天保の頃で150~160文、幕末期で200文。時代によって相場が異なりますが、1文=25円換算で1泊2食付き4,000円弱~5,000円。宿泊客が食料を持参し、自炊することができる木賃宿では、料金は50文ほどで、旅籠の1/4から1/3で済みました。(現在でいえば素泊まり宿やゲストハウスの感覚に近い)。

当時の金銭は(札がないため)重く(1両分で4貫目(16kg)の重さ)、銭は500文くらいしか持ち歩かず、あとは手持ちの分判(1部金や1分銀など)を両替するのが一般的でした。

### 江戸時代の一般的な旅姿

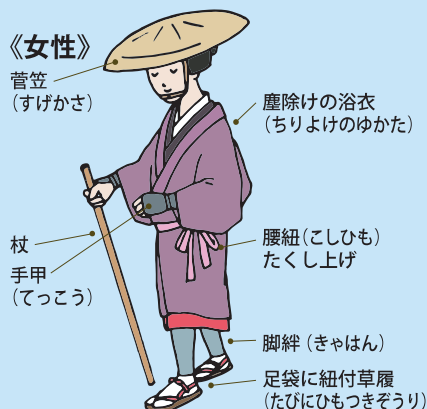
#### ● 男性:

- 菅笠、道中着、股引に脚絆、足元は素足に草鞋、道中差し

#### ● 女性:

- 菅笠、着物の上から塵除けの浴衣、脚絆、足元は足袋に草鞋、杖

#### 《女性》



#### 《男性》



# 現在も営業する主な歴史的建築物の宿



## 旅館糸ちごや 奈良井宿

創業：江戸中期 当初の業態：旅館  
長野県塩尻市奈良井493

「糸ちごや旅館」は、寛政年間の創業以来、200年以上経った現在も旅館として営業しています。



マップQR



## 御宿伊勢屋 奈良井宿

創業：江戸後期 当初の業態：旅館  
長野県塩尻市奈良井388

1818年(文政元)創業の老舗の旅館・伊勢屋は、下問屋の時期もありました。建物は現在も往時の風情を残しています。



マップQR



## 木曽の宿いわや 福島宿

創業：江戸中期 当初の業態：旅館  
長野県木曽郡木曽町福島5169

江戸時代より350余年続いてきた、木曽路でいちばん古い老舗旅館です。11組の宮家、文人、著名人らが宿泊しました。



マップQR



## おん宿蔦屋 福島宿

創業：江戸中期 当初の業態：旅館  
長野県木曽郡木曽町福島5162

創業約320年、木曽福島の街道沿い、木曽川に面した天然の露天風呂、木曽のおもてなし料理響応料理おごっつおが楽しめます。



マップQR



## 田政旅館 上松宿

創業：江戸末期 当初の業態：旅館  
長野県木曽郡上松町本町通り4-52

正確にはわかりませんが創業は180年以上前の江戸時代。今の建物は戦後すぐのものです。



マップQR



## 旅館松代屋 妻籠宿

創業：江戸後期 当初の業態：旅館  
長野県木曽郡南木曽町吾妻807

妻籠宿の中心にあり、1804年創業と言われています。当時の面影を残し手直しはされていますが約200年以上前の旅館です。



マップQR



## 諸人御宿まるや 大妻籠

創業：江戸中期 当初の業態：旅館  
長野県木曽郡南木曽町吾妻1477

1789年(寛政元)に、中山道の妻籠宿と馬籠宿の間宿「大妻籠」に創業。困炉裏を囲いゆったりとお過ごしいただけます。



マップQR



## 旅館つたむらや 大妻籠

創業：明治中期 当初の業態：養蚕(ようさん)農家  
長野県木曽郡南木曽町吾妻大妻籠1479-1

建物は築150年ほど、当初は養蚕農家をしていました。旅館になってから50年ほどになりますが、昔と変わらぬ外観を保ちつつ、建物内は過ごしやすいように改装しています。



マップQR

第1章  
日本遺産とは  
日本遺産木曽路

第2章  
江戸時代以前の  
木曽の暮らし

第3章  
尾張藩による森林保護  
と地場産業の奨励

第4章  
宿場の賑わい・繁栄  
中山道・木曽路11宿


第5章  
明治以降の木曽檜活用、  
森林鉄道

第6章  
木曽の暮らし、風土、  
宗教(御獄山信仰)

第7章  
その他  
(観光宣伝など)





33宿場町	にえかわじゆく <b>贄川宿</b>
中山道 木曾路	町並み 塩尻市
<p>■基本データ</p> <p>住所 塩尻市贄川</p> <p>アクセス JR「贄川駅」から徒歩約5分</p> <p>連絡先 塩尻市教育委員会文化財課 /TEL 0263-52-0904</p>	
 マップQR	

贄川宿は奈良井川が山地から松本盆地へ流れ出す手前、木曾路の北の入口にあたり、南北にのびる中山道に面して家並が500メートルほど連なる集落です。

近世初頭に宿駅制度により木曾11宿の北境の宿場に定められた贄川宿は、鳥居峠のふもとに位置する隣の奈良井宿と比べて宿場としての立地は劣るものの、木曾路の北の玄関口となる地の利から物流業に従事する者が多く出て、奈良井宿とは趣を異にする宿場町として発展しました。

数度の大火により当時の家並みの大部分は失われましたが、重要文化財深澤家住宅など、わずかに古い建物が残り、往時の姿をしのぶことができます。

## 贄川宿の歴史

贄川宿は早くも1533年(天文2)、木曾義在が木曾に宿駅を定めたとき成立したとされます。文献史料によれば、1692年(元禄5)には町の長さ3町14間2尺5寸(約353m)、家数98軒であったとされます。

その後1724年(享保9)には、家数97軒でほとんど同じ、1843年(天保14)には家数124軒、人口545人、宿長4町6間(約447m)と、やや増加を示していますが、宿場の規模は木曾11宿中でも小さい方です。

宿内は三つの町に分かれ、北から下町・中町・上町とつづきます。名前のとおり下町から上町にかけて若干の上り道となっていますが、これは奈良井川の流れに対応して上流を上町と名付けたものです。宿の北の入口、下町から北に小道を下ったところに1976年(昭和51)に復元された贄川関所が建っています。

近世の関所は、現在の場所と小道をへだてた反対側に位置し、木材など統制物資の取締りにあたる口留番所くちどめばんしょでした。三町の境は広小路として街道と直交する路地を設け、また山手側の西側には、厄除・火除の神である津島・秋葉社と水汲場が置かれました。下町と中町の境は

西に行くと観音寺や麻衣廻神社に通じ、この周辺にかつて本陣や脇本陣、年寄役の屋敷が並び、宿の中樞をなしていました。

現在も間口の広い町割を残し、公民館や郵便局が置かれ、宿内の中心部を形成しています。現在の家並は、近世の宿場町の町割を残しながらも近代に至って大きく様変わりしており、塩尻など近隣の都市への勤め人が多く住む閑静な住宅地となっています。

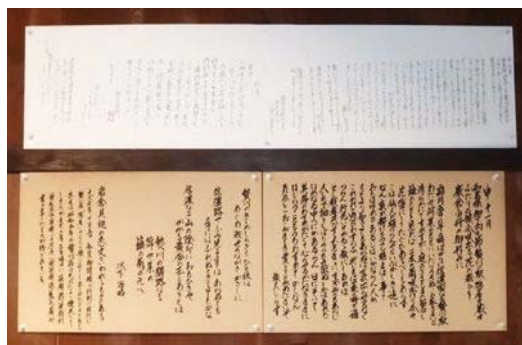
## 宿場の産業

宿場住民の主な生計は山畑耕作と旅籠屋稼ぎが中心であったとされ、規模の小さい宿場の割には旅籠の数が多く、宿場の家々のおよそ1/3が旅籠を営んでいた時期もありました。

農閑期には奈良井で生産された檜物細工や塗物を背負って西国へ行商し、古着を仕入れて戻り、販売するといった商売が行われていました。

## 岩倉具視の恋文

1861年(文久元)、仁孝天皇の第八皇女の和宮が14代将軍徳川家茂に御降嫁されたとき、京より木曾路を通られて江戸に入ったが、その際に同行した岩倉具視は、贄川宿の綿屋・九蔵方の宿に昼頃休まれた。その家には2人の娘がおり、岩倉は一目惚れし、後日恋文をしたため娘に届けたといわれています。



※恋文の資料(後年書き写されたもののコピー)は贄川関所でご覧いただけます。

## 火災の被害

贄川宿は、近世はもとより近代に入っても数度の大火に見舞われています。その理由は建物自体が燃えやすい造りであったことと、宿全体が河岸段丘上の高台にあり、大量の水を確保しにくかったことの2点が挙げられます。

記録に残る近世の大火は、1782年(天明2)10月と1851年(嘉永4)12月の2回で、ともに宿内のほぼ全家を焼き尽くす大火災でした。近代にも、1896年(明治29)3月、1918年(大正7)6月、1930年(昭和5)7月と3回の大火がたてつづけにあり、中町・下町を中心に甚大な被害をもたらしましたが、三度とも上町の家々は類焼をまぬがれました。そのことを裏付けるように、現在の贄川宿では、上町近辺の一部を除き、近世まで遡り得る町家はみられません。

## 贄川の地名

「贄川」という地名の由来について、『木曾路名所図会』は、「いにしえここに温泉あり。故に二エ(執の下に火)川と名づく」としていますが、現在その形跡はありません。

## 平田篤胤門 国学の里

島崎藤村は、木曾を舞台に歴史小説「夜明け前」を書いています。藤村は、父島崎正樹をモデルにした青山半蔵を主人公に、維新前後の渦中を懸命に生きた木曾の人々を描いています。島崎正樹も小説の青山半蔵も平田国学の門下でした。

木曾における平田国学の先駆をなしたのは、この島崎正樹と贄川宿の小澤文太郎重喬です。小澤文太郎は、贄川宿で俵屋という屋号を持つ木曾路屈指の豪商でした。贄川宿には平田国学の入門者が多く、22名に達しています。

そのうち、小澤の紹介による入門者は18名と多く、そのほか、小澤の推薦によって、本山、日出塩にも入門者が輩出しましたが、馬籠宿では島崎正樹以外に入門者はいませんでした。





# 観光・見所

## ① 重要文化財深澤家住宅

深澤家は、贄川宿で近世中期から行商を生業とする商家で、屋号を「加納屋」と称し、京・大坂などから北陸・東北地方への遠隔地商売を展開しました。

1854年(嘉永7)建築の主屋は規模が大きく、2階格子窓を二重の出梁(だしばり)で大きく持ち出すなどの独特の正面外観をもち、内部に重厚な室内を構成するなど、当時の町家建築の到達点として評価されています。

## ② 贄川関所(贄川口留番所) にえかわぐちどめばんしょ

贄川関所は宿の北の端の入口に設けられています。この関所は「軽き御関所」ともいわれ、福島関所の「添え」としての付属の関所でした。

関所の機能の一つに「女改め」があります。土地の婦女が縁組や寺社仏閣参り、奉公等のため通過するときは、領主などの証文や名主の手形を必要としました。そのほか、貴重な木曾檜を使った曲物や漆器、木材の不正な移出などを取り締まる「白木改め」が行われていました。

1976年(昭和51)に復元。文書資料などを展示した資料館となっています。

営業時間:4~11月は9:00~17:00、

12~3月は9:00~16:00

最終入館時間は閉館30分前

入館料:大人300円 中学生以下無料

定休日:月曜日、祝日の翌日、年末年始(12/29~1/3)

このほか冬期休館あり

連絡先:0264-34-3002



## ③ 観音寺

贄川宿の西町裏にあり、真言宗智積院末で、本尊の十一面観世音は室町時代の作です。

806年(大同7)創立と言われ、本堂は1775年(安永4)に再建されました。山門は1792年(寛政4)に再建された楼門で、市有形文化財に指定されています。





あさぎぬの

#### 4 麻衣迺神社

「麻衣」は木曾の枕詞です。贄川の西町裏、観音寺の裏にあり、建御名方命(たけみなかたのみこと)を祭神とします。938年～947年(天慶年間)に諏訪坂の東に鎮座しましたが、1573年～1592年(天正年間)に武田氏と木曾氏の戦いで焼失したため、文禄年間に現在地に再建されました。

木曾では建御名方命を祀る最古の神社といわれています。本殿は市有形文化財、社叢(しゃそう)は市天然記念物に指定されています。7年目ごとに御柱祭が行われますが、御柱の並び方が諏訪神社のそれとは異なり、本殿に並行するように一列に立ち並びます。



#### 5 贄川のトチノキ

トチノキの大木としては県下第一と言われ、長野県天然記念物に指定されています。樹齢は600年以上と推定され、幹回りは約8.6メートル(胸高周囲で9.8メートル)、樹高は32メートルに達し、枝張りは約900平方メートルあります。

#### 6 メロディー橋

国道19号から分かれて贄川関所や贄川宿へ行く、JR中央本線の跨線橋で、明治期の鉄道敷設当時のままのレンガ造りのアーチ橋が残っています。かつての国道は、この橋を渡って贄川宿の町並みに入っていました。現在は歩道となっており、隣に並行して車道が通っています。この歩道の欄干には、鉄琴仕様の木曾節のメロディーを奏する設備が設置されていることからこの名が付いています。





## 構成文化財①

しおじりしならい

# 塩尻市奈良井

34宿場町

ならいじゆく

中山道  
木曾路

## 奈良井宿

建物・町並み・重伝建(宿場町)

塩尻市

### ■基本データ

- 住所 塩尻市奈良井
- アクセス JR「奈良井駅」から徒歩すぐ
- 連絡先 塩尻市観光協会 奈良井宿観光案内所  
／TEL 0264-34-3160  
塩尻市教育委員会文化財課／TEL 0263-52-0904
- 指定 国重要伝統的建造物群保存地区(1978年)



マップQR

中山道の34番目の宿場町で、奈良井川上流に位置します。江戸時代末期の町並みが約1kmにわたって続いており、1978年(昭和53)全国で10番目の重要伝統的建造物群保存地区に選ばれました。旅籠や問屋、千本格子の家々などが並ぶ街道散策が江戸の往時をしのばせると人気です。

## 歴史的背景

中山道一の難所といわれた鳥居峠の登り口にある鎮神社から奈良井川に沿って880mほど続く、木曾で最も規模の大きい宿場でした。かつて本陣1、脇本陣1、旅籠5、家数409を擁

していた奈良井宿は「奈良井千軒」と謳われたほどで、中山道でも1、2位を争うほど栄えたといわれます。

『壬戌紀行』(大田南畝)では1802年(享和2)当時の奈良井宿が次のように描写されています。「奈良井の駅舎を見渡せば、梅、桜、ひかん桜、はた李の花、枝をまじへて春のなかばの心地せらる。駅亭に小道具をひさぐもの多し。膳椀、弁当箱、盃、曲物など皆此辺の細工なり。されど、たくみあらくして会津細工のもののごとし。駅舎もまた賑わへり」

交通の要所でもあり、木曾漆器、特に曲物と塗櫛の主産地でした。

## 宿場町のつくり

町並みの背後の山裾に「奈良井五カ寺」といわれる5つの寺院が配され、街道に沿って南側から上町、中町、下町に分かれています。

上町と中町の境には「鍵の手」と呼ばれるクランク形状の道路があり、中町と下町の境は横水という沢で区切られています。下町には柵型という柵のように四方形に石垣や土塁を築いた場所が設けられています。「鍵の手」は下町の柵型と同様に、宿場内に道の屈曲を作り、敵の直進と見通しを防ぐという宿場町を守るための施設として機能していました。

## 建物の特徴

奈良井宿の建物には、2階を少しせり出した出梁造り、入口の大戸、日常の出入りに使うくぐり戸、入口の横のしとみ蔀戸、真黒くすすけた2階の手すり格子、その両脇につけられた白漆喰の袖うだつ、各部にさりげなくそえられた彫物などが残されています。

しとみ蔀戸とは、入口の横にあり、両脇に立てられた通柱に戸を通す溝が掘られていて、戸を横にして上から入れる構造になっています。上二枚が障子戸、下1枚が板戸になっている場合、昼間は戸を入れず開け放しにして店先にしたり、障子戸を入れて明るくなるようにします。また、夜は防犯のため、板戸に替えて使用します。使用しない戸は天井に跳ね上げるなどの格納の工夫もあります。

長く突き出た軒の小屋根には、ひさし庇をおさえたさるがしら猿頭と呼ばれるさんぎ棧木が見られます。猿頭とは、上端が山形に切られ、断面が五角形の材で小屋根をつけた二階の出し梁を支える役割があり、波型の形が猿の頭に似ているため名がつけました。

ほかによろいびさし鎧庇と呼ばれるものがあります。通常庇は棧の上に屋根板を並べて釘を打ちますが、奈良井の場合は棧を上にし、その下に屋根板を敷く独特の構造で作られています。棧には猿頭を使用し、吊り金具で釣られています。屋根板は上に重ねて敷かれ、鎧のような形になることから、鎧庇と呼ばれます。庇は吊り金具で釣られているが、逆さ釘で、強度はあまりありません。これは盗人防止の構造だと言われています（盗人が庇に足をかけたら崩れ落ちる）。

## 奈良井宿保存活動

奈良井は近代以降、大火がなかったことから、江戸末期の様式を残した町家が残っていました。旧中村家住宅（中村邸）の宿場外移築問題が起きたことを機に、地域住民の町並みに対する関心が高まり、1968年（昭和43）、官民学連携による町並み保存運動が始まりました。かかわった多くの人々の熱意と宿場町の特色が国に認められ、1978年（昭和53）に重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けました。

その後も保存運動は継続され、1989年（平成元）に国土交通大臣表彰の「手づくり郷土賞」、同2005年（平成17）「手づくり郷土大賞」、2007年（平成19）「美しい日本の歴史的風土百選」、2009年（平成21）、（社）日本観光協会「花の観光地づくり大賞」などを受賞しています。



旧中村家住宅（中村邸）





# 観光・見所

## ① 上問屋資料館(手塚家住宅)

宿駅に定められた宿場では、官用荷物の輸送や公人旅行者のために、幕府により一定数の人馬の常備が義務付けられ、木曾では一宿につき25人の歩行役と25頭の伝馬(てんま)を用意していました。その運営を行っていたのが問屋(といや)です。

奈良井宿には上・下2軒の問屋が置かれてましたが、上問屋は手塚家が1602年(慶長7)から明治維新までのおよそ270年間継続して問屋を務め、時には庄屋を兼務することもありました。

建物は古文書・陶器・漆器などが展示された資料館として公開されており、2007年(平成19)に国重要文化財に指定されています。

※開館時間・入館料等については、TEL.0264-34-3101までお問い合わせください。



## ② 越後屋

奈良井を代表する旅籠。十返舎一九の『続膝栗毛』では、米の飯でなく蕎麦にすれば安くすると誘われた弥次さん喜多さんが1泊2食116文(米飯なら150文)で泊まったと記されています。現在も旅籠「糸ちごや旅館」として営業しています。

## ④ 水場

奈良井宿の中には現在6箇所の水場があります。単に水を飲んだり、洗い物をするだけでなく、利用者の憩いの場や情報交換の場にもなっていました。また、建物が密集している宿場では、水場は火災の延焼防止にもなっていました。



## ③ 脇本陣徳利(とくり)屋(原家住宅)

1937~1940年(昭和12~15)頃まで旅館として営業し、泉鏡花(小説家)が「眉かくしの霊」を執筆した場所として有名。明治時代には幸田露伴(小説家)、島崎藤村や正岡子規(俳人・歌人)、岡本綺堂(劇作家・小説家)も宿泊しました。「夜明け前」の取材をしていた藤村が囲炉裏端に座る写真が残っています。現在は郷土館として調度品や文書が展示されるほか、食事処や茶房として営業。正面の部戸が特徴的。市指定有形文化財。

## ⑤ 鎮(しずめ)神社

1618年(元和4)に奈良井で「すくみ」という病が流行り、多くの犠牲が出たので、下総(しもふさ)(現在の千葉県・茨城県・東京都の一部)香取神社より経津主命(ふつぬしのみこと)を祭神として迎えました。それにより病が治ったため、鎮大明神と呼び、村人の産土神(うぶすながみ)として祀ることになったと言われています。

毎年8月11・12日には氏子総出で盛大な祭りがおこなわれます。本殿・社叢・祭礼は市文化財に指定されています。





## 6 奈良井五カ寺

うなり石のある専念寺(真宗)、関ヶ原の闘いの折に徳川秀忠が陣屋にしたと伝わる法然寺(浄土宗)、お茶壺道中の本陣を勤めたこともある長泉寺(曹洞宗)、マリア地蔵のある大宝寺(臨済宗)、浄龍寺(真宗)と5つの寺があり、宿の繁栄がうかがわれます。



法然寺(浄土宗)



大宝寺(臨済宗)



専念寺(真宗)

### ● 専念寺のうなり石

「入口にある大きな石が夜になるとうなり出したため、釘を打ちつけたが止まらなかった。そこで酒をかけてやったら、うならなくなった」という伝説があります。今でも打ちつけた釘が残っています。



長泉寺(曹洞宗)



浄龍寺(真宗)

### 日本遺産木曾路 構成文化財

④旧中村家住宅……………3章-40P参照





## 8 木曾の大橋

奈良井宿の裏手、奈良井川にかかる総ヒノキ造りの大橋。1991年(平成3)3月竣工。橋の構造は木造単径間アーチ歩道橋といい、長さ33m、総幅6.5m、橋脚のない橋としては日本有数の大きさを誇ります。橋を渡ると、「水辺のふるさとふれあい広場」として整備された公園があります。4～11月上旬まで、日没後にライトアップされ、幻想的な姿を見せます。



## 9 檜川歴史民俗資料館

鳥居峠の登山口にある資料館。明治、大正、昭和期の木曾谷に暮らした人々の生活を偲ぶ数々の品物や生活道具が展示されています。

※開館時間・入館料等については、TEL 0264-34-2654までお問い合わせください。

## 7 奈良井城跡

大宝寺の裏山にある小高い丘は、かつて奈良井義高が木曾義在の代(1532～1555年)に守った奈良井城の跡です。築城の時期は定かではありませんが、その規模は東西35間(約63.6m)、南北52間(約94.5m)といわれ、空濠の跡もかすかに残っています。

城主義高は1545年(天文14)、木曾義康が小笠原長時と同盟して、武田信玄と塩尻峠で戦った際、その先鋒となって勇名を馳せました。また、1554年(天文23)、武田氏木曾来襲のときには贄川砦を死守しますが、翌年、武田氏再攻に敗れ、福島に退きました。しかし、木曾、武田の和議があり、再び奈良井城の城将として守ることになりました。

その後、1582年(天正10)の鳥居峠の合戦でも大功をたてましたが、家康に従っていた義昌が秀吉に寝返ったことに苦言を呈したことで殺されてしまったといわれます。その墓が、裏山の中腹にあります。

### ●外国人観光客対応

近年の外国人観光客の増加に対応するため、奈良井宿では観光スポットや案内板などの多言語表記化、店や旅館の従業員のための英会話講座などに取り組んでいます。

### ●重伝建周遊バス

塩尻市奈良井と木曾平沢2つの隣接する重要伝統的建造物群保存地区を結ぶシャトルバスが運行しています。お気軽にご利用下さい。

- ・運行区間:奈良井宿(権兵衛駐車場)～木曾平沢(暮らしの工芸館)間
  - ・料金:無料
- ※運行期間、運行時間については、奈良井宿観光案内所 / TEL 0264-34-3160 にお問い合わせください。

### ●観光ガイドによる案内

奈良井宿の象徴的な建物である中村邸、上間屋資料館、えちごや旅館 本陣跡などを地元ガイドによって案内しています。要予約。

※料金はガイド1名(20名まで対応)につき1,500円(約1時間)奈良井宿観光協会HPの申込フォームから申し込むか、申込書をダウンロードして必要事項を記入してFAXでお申し込下さい。希望日の3ヶ月～1ヶ月前まで。

### ■主要参考文献／

- 『檜物と宿でくらす人々 木曾・檜川村誌 第3巻 近世編』(木曾郡檜川村 1998)
- 『学習ガイド おしおじり学びの道』(塩尻市 2007)
- 『加納屋深澤家住宅調査報告書』(檜川村町並み文化整備課 2004)



35宿場町

やぶはらじゆく

# 藪原宿

町並み 木祖村

■基本データ

住所 木曾郡木祖村大字藪原

アクセス JR「藪原駅」から徒歩すぐ

連絡先 (一社)木祖村観光協会  
/TEL 0264-36-2543



マップQR

鳥居峠を挟んで奈良井宿の反対側にある宿場町。峠越えの前に、または峠越えの後に休む旅人らでにぎわいました。火災のため、その面影はほとんど見られませんが、旅籠米屋、雪舟や応挙の書画を蔵する極楽寺などがあります。

江戸時代に大流行した木櫛「お六櫛」の主産地であり、最盛期には住民の六割が従事していたと言われています。現在も村の特産品として制作・販売されています。

境峠・野麦峠から高山へ抜ける飛騨街道奈川道の分岐点でもあり、岡谷・諏訪の製糸工場に向かう工女らも休息した場所でもありました。

## 藪原宿の歴史

幕府の交通上の手段とされ、本陣や脇本陣が置かれ問屋場などの施設や一里塚、高札場が作られ、今もその跡地が残っています。

藪原宿は中山道の宿場町として発達すると共に奈川から飛騨へ抜ける飛騨街道奈川道との追分としても発達しました。

藪原宿は江戸から35番目、京都からも35番目というど真ん中の宿場です。1730年(享保15)2月から1871年(明治4)まで幕府の鷹匠たかじょう役所が置かれていました。

1695年(元禄8)の大火により、各屋敷から1間につき1寸の土地を提供して広小路を作り、火災の延焼を防ぐためそこに「防火高塀」を設置し水路を流しました。今なお防火塀が残っています。

1861年(文久元)に総勢約3万人、馬2千匹による皇女和宮行列が通行されました。木曾街道での和宮は、1日目は三留野宿に、2日目は上松宿、3日目は藪原宿で泊まったとされており、宿一帯がてんてこ舞いの忙しさだったと伝わっています。

第3章  
尾張藩による森林保護  
と地場産業の奨励

第4章  
宿場の賑わい・繁栄  
中山道・木曾路11宿

第5章  
明治以降の木曾檜活用、  
森林鉄道

第6章  
木曾の暮らし、風土、  
宗教(御嶽山信仰)

第7章  
その他  
(観光宣伝など)





## 観光・見所

### ① 木祖村郷土館(きそむらきょうどかん)

「お六櫛」をはじめ、300年の伝統をもつ勇壮華麗な「荻原祭」、薬草の産地でもあった村の人々の暮らしぶりを伝える資料が展示されています。

お六櫛のコーナーでは、当時の櫛職人の仕事場が再現されており、事前に連絡をすれば職人の実演が見学できる場合もあります。透き櫛・とかし櫛の製造工程から道具、その他櫛に関する文献史料、20分ほどの制作工程の映像などを見ることができます。

### ● 中山道鳥居峠越えコース

(一社)木祖村観光協会では、荻原宿～鳥居峠～奈良井宿間を有料ガイドの派遣をおこなっています。

荻原駅～本陣跡～御鷹匠役所跡～消防署横～石畳分岐～丸山公園～御嶽神社(御嶽遥拝所)～峠の茶屋～中の茶屋～鎮神社～奈良井駅

所要時間:約3時間(峠越えのみ)

\*荻原宿・奈良井宿の散策、鳥居峠での昼食などのオプションを含むと約4時間

料金:5,500円(1名～5名)、8,500円(6名～15名)

連絡先:(一社)木祖村観光協会/TEL 0264-36-2543



### ● お六櫛の製作体験

予約制でお六櫛が製作できる。専用の道具を使いながら、細かい作業を体験します。

料金と所要時間:手引き4,000円/人、約4時間程度

みがき2,500円/人約1時間30分程度

受け入れ可能人数:3名～15名

会場:村民センター等(公共施設)

連絡先:(一社)木祖村観光協会

/TEL 0264-36-2543 ※予約は3名以上から

### 日本遺産木曽路 構成文化財

- ⑦ 木祖村史跡 鳥居峠 ……2章-28P参照
- ⑧ 鳥居峠のトチノキ群 ……2章-29P参照
- ⑨ お六櫛の技法 ……3章-45P参照
- ⑩ 水木沢天然林(水木沢郷土の森) 3章-33P参照

■主要参考文献/『木祖村誌 源流の里歴史(上)』(木曾郡木祖村誌編纂委員会 2001)

『木曾～歴史と民俗を訪ねて』(木曾教育会郷土館部編著 信教出版部 2010)

『木曾の鳥居峠』(木曾郡木祖村教育委員会 1974)

『木曾のお六櫛』(木曾郡木祖村教育委員会 1975)